教師の指導は丁寧になった感じだったが、動員で割かれた空白を埋めるためかテンポが早く、理解不足のままでテストに臨む仲間の救済に答案を見せ合うカンニングもあった。

間違った連帯意識と知りつつ留年を避けさせる方便であった。

部活も復活し、徐々に新しい息吹の中で学校づくりが始ったのは四年生に進級してからだったと思う。

現在首都圏と奥州市に黒陵二十回生の組織があり、北上市にも暁鐘二十日会（毎月定例会）がある。

再来年は傘寿を迎えるわけで、多くの仲間と集い、校歌を斉唱し、応援歌で気勢を揚げ、飲みかつ歓談できる機会が待ち遠しい心境である。

「北上夜曲」余話

高橋　正郎（24回生）

《北上市歌》のような位置づけにある「北上夜曲」は、今では北上市で毎年「歌唱コンクール全国大会」が開かれている程である。

そして、戦時中の黒沢尻中学には、ひとりのうら若き配属将校が軍事教練を担当していた。

その「北上夜曲」と、「配属将校」との〝交差点〟とは―。

「北上夜曲」誕生

三好京三『北上川　神楽囃子』―「北上夜曲との再会」―より

―この「北上夜曲」は、昭和十六年二月に生まれた。作詞者は岩手師範学校一年生、十八歳の菊池規さん、作曲者は八戸中学校五年生、十七歳の安藤睦夫さんであった。―

―この二人は、安藤さんの叔父が菊池さんの師範学校入学前に通っていた水沢農学校の配属将校だったという縁で知り合った。―

作曲者の安藤睦夫氏の叔父上こそ、のちに黒沢尻中学の配属将校となる安藤清蔵教官である。

―昭和三十一年、教師として九戸郡宿戸小学校に赴任したわたしは、ＰＴＡ会長の安藤睦夫さんが「北上夜曲」の作曲者であることを知る。（中略）正調の「北上夜曲」を作曲者直伝で教わると、とても嬉しかった。―

直木賞作家、三好京三氏は、作曲者直伝の正調「北上夜曲」の正調歌手でもあった。

三好氏が審査員をつとめた北上夜曲の歌唱コンクールが、なぜ北上市で開催されているのだろう。

―元北上市長の斎藤五郎さんのお力によるものだ。早くから北上市の街おこしを考えておられた斎藤市長さんは、名曲「北上夜曲」を「わが市の歌」と願い出た。―

「レクイエム」

三好京三「小説　北上夜曲」より

―叔父は安藤睦夫と菊池規を引き合わせた後、二年ほどで現役に呼びもどされた。（中略）農学校配属時代は少尉であったが、現役となったときは中尉に昇進した。―

―軍刀をさげ、日の丸の旗を襷にして凛々しくなった安藤清蔵中尉は、壮行会の席で言ったそうである。「飲み助叔父」ァ、睦の作った流行歌でお別れしァんす」―

―清蔵叔父は美声であった。急いでギターを取り出して最後の伴奏をしながら、安藤睦夫は、こんなすばらしく誰にも好かれる人間は、死んではならない、と思ったという。―

安藤教官は、『黒陵八十年史』では昭和十六年から十八年前半までの在籍、『同窓会員名簿』では戦死と記載されている。

黒陵第十四回生から第二十回生までの同窓生にとっては記憶に残る教官と推察される。筆者兄（15回生）は、剣道の稽古にゆき途中に声を掛けられたこと、紅葉の坂を長靴を履いて去り行く姿を回想する。もひとりの兄（20回生）は、温かみのある教官からの教練を懐かしむ。

奇しくも、そして図らずも「北上夜曲」は、その〝プロデューサー〟安藤清蔵教官への鎮魂曲となった。

「全滅の島」

角田房子『一死、大罪を謝す』―「ビアク島死守」―より

―ビアク支隊の主力となった歩兵第二百二十二連隊は、弘前で編成された岩手県の郷土部隊。（中略）これが海上機動連隊に改編され、上海から豪北方面に出航したのは昭和十八年十一月であった。―

ビアク島は、ニューギニア本島の西北に位置し、日米両軍にとっても戦略的見地から重要性をもつ要衝であったという。

―（昭和十九年六月）斎藤第一大隊も安藤集成大隊も壊滅状態に陥り、残余の各隊と支隊本部は米軍の後方にとり残された形になった。ビアク島の守備についた支隊兵力一万二千八百人は、ほぼ全員がこの島で死んだ。―

（傍線筆者／台湾人軍夫などの寄せ集め）

そしていま、「戦後六十年」も「不戦六十年」も通り過ぎた。戦争と戦場は、常に悲惨で残酷である。弔詩に美辞麗句は要らない。

安藤清蔵先生はいま櫻の樹の下に眠る。

昭和十年代後半、作詞者の菊池規氏は岩手師範学校、作曲者の安藤睦夫氏は盛岡高等農林学校の学生として、盛岡で再会を果たした。この二人の再会によって「北上夜曲」が、まず最初に盛岡の若者たちに伝播され、全国に浸透していった。

昭和二十年代後半、学生時代のコンパでのこと―。疎開先での盛岡中学に在学経験のあるクラスメイトが、「北上夜曲」を歌い出したときは驚きと懐かしさで胸がいっぱいになった。当時、「ともしび」に代表される歌声喫茶で、すでにこの曲が流行するきざしがあった。

作詞の菊池規氏は盛岡の小学校長歴任のあと、すでにこの世を去っている。ことしに入って作曲の安藤睦夫氏と〝伝承者〟の三好京三氏もあい次いでみまかった。

それでも、「北上夜曲」はニッポン歌謡曲のスタンダード・ナンバーとしてこれからも歌い継がれてゆくに違いない。